「食育」とは、幼児の何を育もうとしているのだろうか

最近、「食育」という言葉をよく耳にする。
あるメル友の「食育」に関する論文をいただいた。
この論文を目にして、次のようなことを思い出した。

①大都会の保育園長のメル友から聞いた話だが、朝食を食べてこない幼児が年々増加しているとか。
幼児たちに聞くと「お腹が空いている」という。
親に「朝食を摂らせるように」と話すと、「子どもが『食べたくない』というから。」との返事とか。
幼児は、仕事に出かける準備等で忙しくて朝食を摂らない親を見て、やむなく自分も「食べたくない」と云うのだろうことは容易に推測される。
こうした傾向から、朝食を出す保育園も増えてきているが、どこかおかしな話と思う。
また、昼のお弁当に菓子パン一つを持たせるだけの親もいるとか。

園長が云うには、親に「ご飯を食べたい」と云える子どもにどう育てるかが、食育指導以上に大事なことと云う。
確かに、食事に限らず、幼児期に身近な親に甘えて、自分の気持ちを伝える力が育まれずに成長することの方が先々大問題。
最近の親子間の悲惨な事件の根っ子も、幼い頃からのこうした日常生活場面でのコミュニケーション（相互交渉）不形成にあるのでないかと、つい思ってしまう。
それだけに、論文を書いたメル友へは、単に「食育」という言葉のイメージの狭い枠に留まらず、親子間のコミュニケーションの側面からも食育論を発展させることを期待していると伝えた。

②保育園、幼稚園で、さつまいもの収穫を幼児に体験させるカリキュラムを組んでいる所も多い。
でも、農家の方が先に掘り起こして畑に並べておいて、園児たちはただ畑から拾い集めるだけを「収穫体験」と位置付けている保育所、幼稚園も多いとか。

「食育」を通して幼児の何を育てようとしているのかが、保育園、幼稚園側で十分に位置づけられておらず、「秋だから、収穫体験カリキュラムを！」というだけの形骸化したカリキュラム。

2005 年に食育基本法が成立し、その中で、子どもたちに対する食育を特に重視し、教育関係者が積極的に子どもの食育を推進するよう努めることも唱われているが、さつまいもをただ拾い集めるだけを収穫体験と考えるような現場のプロでは、親への食育指導も十分に出来ないだろうし、食育基本法も形骸化するのでないかと危惧する。

阿部幸泰　　（2008 年 4 月 9 日　記）